

西幡豆 143.5ha

資源の循環 × 人・仕事の循環で、 「農業的に生きる仕事」が生まれ続ける地域へ

専門分業型・循環農村 インキュベーション構想 | v12
complete trace FINAL | 地域と専門家の声で更新される実証仮説

CONCEPT IMAGE

※2032年の暮らしを表したイメージ。実際の配置計画ではありません。

この資料の読み方

完成図ではなく、問い→土地→実証→商い→運営→更新の順で読む。

01 問いとビジョン

家族の問いから 2032 年の日常へ

02 なぜ循環か

専門化を残し、切れた循環だけを地域で再接続

03 土地と実証

Phase 0 で測り、使える 3 ～ 5ha を確定してから試す

04 人・仕事・商い

独立した小さな経営が成立することを成果に

05 運営と公共価値

協議会＋事務局法人で管理性と自立性を両立

06 Appendix

先行事例・仮置き・反証履歴を分離して確認

この構想は、家族との対話から始まった

家族

「牛にトウモロコシを食べさせる意味は何か。」

この問いから、会話は三つの方向へ広がった。

- 01 人が食べられる作物を作れる土地を、飼料専用にする必然性はあるか。
- 02 牛・羊・鶏・菌類・森林は、それぞれ何の機能を担えば循環が強くなるか。
- 03 一軒の農家ではなく、地域全体で資源をつなぎ直せないか。

この問いを正解と決めず、土地・物量・経営・行政の立場から反証したのが本資料である。



2032年の暮らしを描いたコンセプトイメージ

家族

「経営は別。
でも村全体で循環すれば、
一つ大きな農家と言える。」

→ここから「専門化の次」を調べ始めた

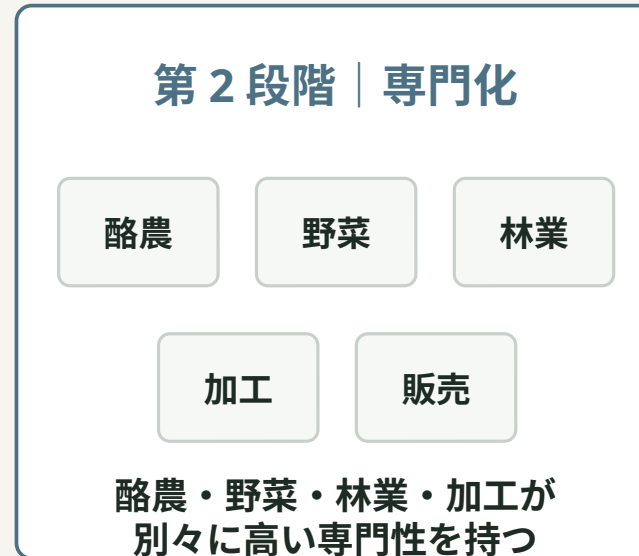
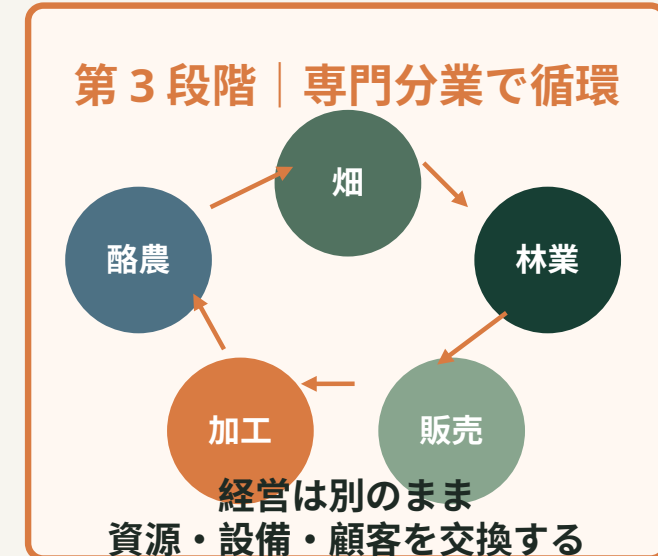
人が食べられるものを、まず人へ。家畜は「低機会費用バイオマス」を価値へ変える

家族の問いから最初に確定した、土地・バイオマス利用の優先順位。



家畜頭数は「売りたい量」ではなく、地域で持続的に供給できる餌量から逆算する。100% 自給や「グラスフェッド＝善」を目標化せず、土地・餌・頭数・労働を全体で判断する。

家族が描いたのは「昔に戻る農業」ではなく、専門化したまま村で循環する“次の農業”だった



家族の発想と、欧州の研究が重なるポイント

「専門化を否定しない。失われた循環だけを、農場を越えて取り戻す。」

—— 次の問い 実際に、世界ではこの「専門分業の再接続」をどう実装しているのか？



2032年の暮らしのイメージ

海・茶畑・里山がつながる、新しい日常の風景



※コンセプトイメージであり、実際の配置計画ではありません。

この家族の問いを土地に翻訳すると、2032年の西幡豆では「農業的に生きる仕事」が生まれ続ける

ここでつくりたいのは、農場ではなく「農業的に生きる仕事が生まれ続ける地域」。



- | | | |
|-------|--------|-------------------------------|
| 06:30 | 山羊と畑 | 森の周縁を見回り、昨日の竹チップと堆肥を確認する。 |
| 10:00 | 加工と販売 | 畑の収穫物を加工し、地元店とECへ。 |
| 13:00 | 高校・農大生 | 答えのない土地課題を実習・研究テーマにする。 |
| 16:00 | X人材 | IT・デザイン・機械・木工などの専門が農村の仕事に混ざる。 |
| 19:00 | 地域へ戻る | 住むのは山の中だけではない。周辺集落・駅・店とつながる。 |

—— 次の問い この日常は、何を「循環」させると生まれるのか？

西幡豆で循環させるのは「資源」だけではない。「人と仕事」も循環させる

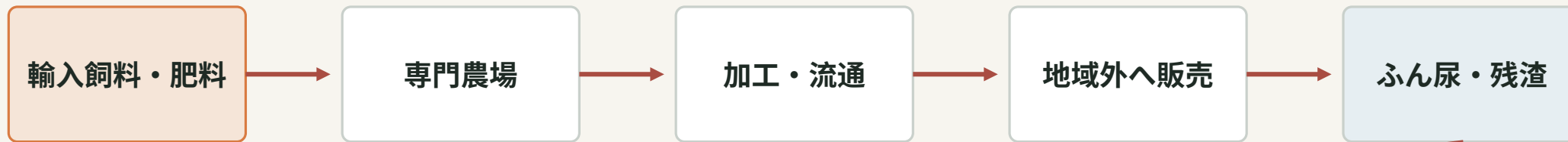


昔の「一軒の複合農家」に戻るのではない。
専門性を保ったまま、地域全体で二つの循環を設計する。

—— 次の問い そもそも、なぜ世界は「循環をつなぎ直す」方向へ動いているのか？

専門化で農業は強くなった一方、飼料・肥料・残渣の循環は地域から切れた

現在の直線型



外部依存とロスが増える

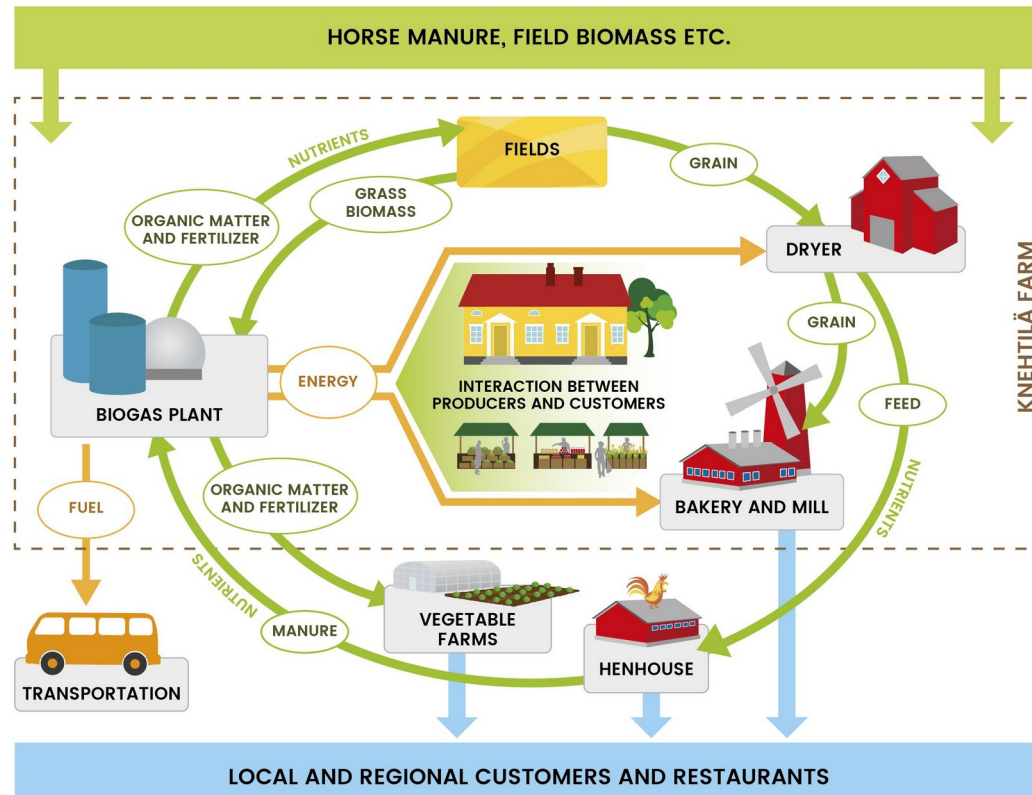
研究が示すこと 作物と畜産の分断は窒素ロスを生み、飼料・肥料の外部依存を高める。
解決策は「全部を一農家に戻す」だけではなく、地域スケールで再接続すること。

—— 次の問い では、「循環型」とは具体的に何を変えることなのか？

家族の「経営は別、循環は村で」という発想は、フィンランド・Palopuro ですでに実装されている

ヘルシンキから北へ約 60km。3 農場・パン工房・バイオガス等を地域でつなぐ。

Palopuro Agroecological Symbiosis



PALOPURO / HYVINKÄÄ / FINLAND

何が違うのか

- 各農場・加工・エネルギーは別々の機能を持つ
- 草・穀物・ふん・有機物・エネルギーを地域で交換する
- 消費者との接点まで、地域システムとして設計する

西幡豆で借りたい原理：
「一社化」ではなく「地域で接続」

—— 次の問い ただ、県有地なら「一社にまとめて任せる方が楽」ではないか？

企業庁なら「一社に任せた方が楽」と考える。
それは正しい。

「県有地なんだから、
一社に全部任せた方が
契約も管理も楽では？」

その通り。「管理の簡単さ」だけを目的にするなら一社型は合理的。
問題は、県がこの土地から何を地域に残したいか。

次に比較するのは「どちらが善いか」ではなく、「何が県内に残るか」。

一社型は雇用を生む。ネットワーク型は「地域に経営者と産業基盤」を残す

一社完結型

県との契約	シンプル
失敗時のリスク	一社撤退で全体が止まりやすい
地域に残る力	雇用は残るが、経営機能は一社に集中
次の人の参入	会社の採用・方針次第
価値の作り方	社内最適

専門事業者ネットワーク型

県との契約	事務局法人 1 者にまとめられる
失敗時のリスク	事業単位で入替・縮小が可能
地域に残る力	複数の経営者・取引関係・技能が残る
次の人の参入	新しい専門事業として参加できる
価値の作り方	地域全体の資源・設備・顧客を組み合わせる

**結論：県の「管理窓口」は一つにできる。
中の経営まで一社にする必要はない。**

次の問い 「分ける」ことに、農業システムとしての合理性はあるのか？

専門経営を分けるからこそ、生産性を保ったまま資源循環を取り戻せる



2025 | European Review of Agricultural Economics

混合作物・畜産地域では、
「複合農家だけ」よりも
専門農家を含む組合せの方が収益性が高いと分析。

2017 | European Journal of Agronomy

ただ連携するだけでは環境便益は自動的には出ない。
資源量・土地配置・契約・調整を設計する必要がある。

だから西幡豆では「複数事業者＋共同ハブ＋明確なルール」をセットで設計する。

—— 次の問い では、このモデルを「なぜ愛知」でやるのか？

全国モデルを、愛知から始める。愛知の強みは「農・工・人・市場の近さ」だ

HOKKAIDO

強み＝広さ

大規模な草地・放牧・単一経営でも土地の中で飼料・家畜・ふん尿を回しやすい。

→ 全国の一つの参照例。ただし西幡豆へそのままコピーはしない

AICHI

強み＝密度

農業産出額

3,551 億円 | 全国 8 位

製造品出荷額等

58 兆 218 億円 | 全国 1 位

農業 × 加工 × 製造 × 教育 × 都市市場が近い。
「遠くへ運ぶ」のではなく、近距離で異なる専門性をつながられる。

——— 次の問い しかも、愛知県自身の 2030 政策は、すでに「人材・生産・農村・環境」を同時に掲げている。

愛知に「唯一の正解」があるのではない。全国へ持ち出せる実証方法を、まずここで試す



農業大学校も2026年に「教育研修基本計画2030」を公表。
県有地・農業政策・教育資産を横断するタイミングが合っている。

—— 次の問い この県の強みを、どの土地で試すのか？

25 年「一用途」で決まらなかった 143.5ha を、複数事業を育てる実証地に変える

■ 現況写真



「出典：国土地理院撮影の空中写真」

3

1998-2001 土砂採取+造成

山を削り、土砂と平地で価値化する構想

2001 土砂採取中止

事業前提が崩れる

2003 県の基本構想

採石場跡・圃場跡を活用／その他山地は保全

2004- 大規模案が具体化せず

法規制・採算・アクセス等が課題

2026 提案募集

143.5ha の新しい使い方を再探索

問いを変える：「143ha を何にする？」→「どこから何を試す？」

次の問い 143.5ha を一枚岩で扱わず、土地履歴と地形で分ける。

「西幡豆ミライの森」は捨てない。土地の扱い方の OS として残す

循環農村は新しい思いつきではなく、前案の土地利用原則の上に事業を重ねた更新版。

調べる

水・土・地形・資源を測る

土地利用の OS

西幡豆ミライの森

歩く

動線を読み、地域とつなぐ

守る

触らない森・水系を先に決める

試す

小さく始め、Gateで続ける

学ぶ

答えのない実地を教育に開く

その OS の上に、茶・果樹・羊・山羊・養蜂・ハーブ・丸太利用・加工・販売などの「独立した小さな事業」を載せる。



現況から2032年へ

分散した地域資源を、海・茶畑・里山がつながる循環型の風景へ



現況



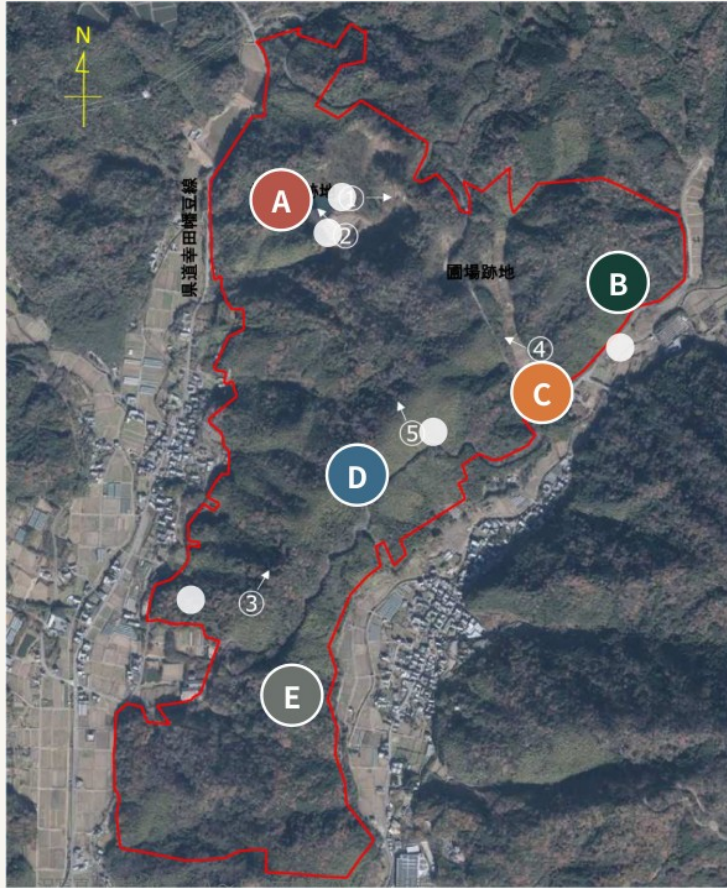
2032年



現況を否定するのではなく、今ある風土と資源を重ね合わせながら、持続可能な暮らしと体験の場へ育てていく。



143.5ha を一括開発せず、土地の履歴と機能で A ～ F に分けて使う



- | | | |
|----------|-------------|---------------------------|
| A | 採石場跡 | 共同拠点候補。ただし地盤・水質・アクセスを先に調査 |
| B | 圃場跡 | 人間向け食料・土壌循環の最有力 |
| C | 竹林 | 竹材・チップ・敷料・堆肥副資材の循環実験 |
| D | 二次林 | 森林管理・原木・落葉・限定的な動物利用 |
| E | 南部森林 | 水源・生態系・保全主体。初期は触らない |
| F | 周辺集落 | 住居・既存農家・駅・店との接続 |

—— 次の問い 最初から A ～ F 全部を使うのではなく、最初の一周に必要な 3 ～ 5ha だけを選ぶ。

土地利用イメージ（概念ゾーニング）

茶畑・果樹・畜産・養蜂・木材活用をつなぐ循環型の構成



※配置・面積・動線は検討用の概念図です。

3～5ha は先に決めない。測ってから「使える 3～5ha」を確定する

家畜・茶・果樹・養蜂などを選ぶ前に、土地が何を支えられるかを実測する。

水

夏の最低流量
水質／取水／排水

微気象

暑熱／日射
湿度／風

土地

土壌／地盤／斜面
水系／搬入道路

資源

竹／落葉／草
丸太／蜜源／更新量

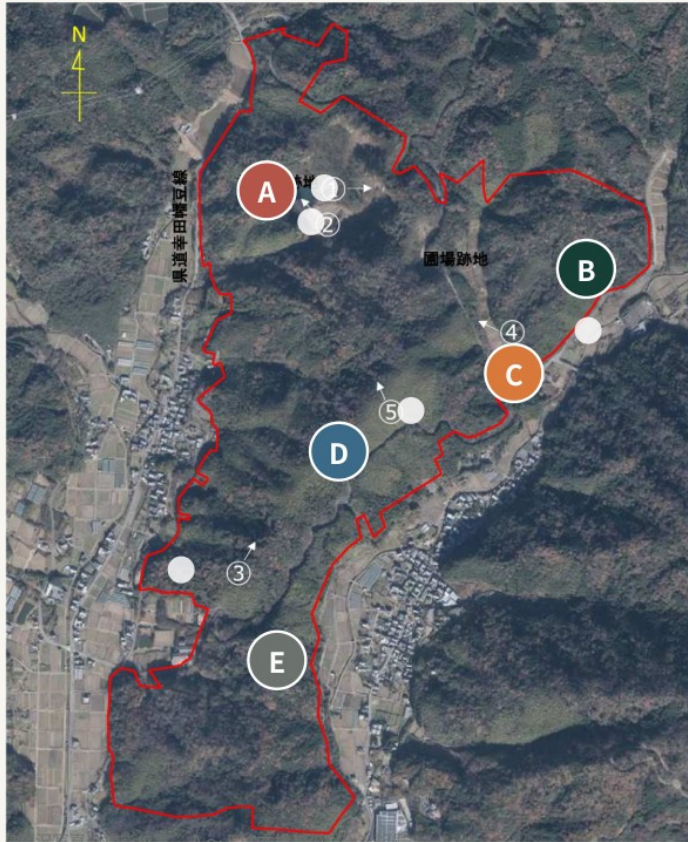


ゾーニング境界と「使える 3～5ha」を確定

→ その結果で、Phase 1 の 2～3 テーマを選ぶ

測定結果が仮説と違えば、仮説の方を変える。

Phase 0 で「使える 3 ～ 5ha」を確定した後、B ・ C ・ D 等で小さな循環を試す



Phase 1 で使う

- B | 圃場跡** 0.5 ～ 1ha 人が食べる作物・ハーブを優先
- ↓
- C | 竹林** 0.5 ～ 1ha 竹チップ・敷料をつくる
- ↓
- D | 管理林・周縁** 1 ～ 2ha 羊・山羊／森林管理／丸太利用を比較

Phase 1 では使わない

A | 調査のみ

E | 保全

F | 地域接続

※3 ～ 5ha は作業仮説。現地測量・水・地盤・法規制確認で確定。

—— 次の問い この 3 ～ 5ha で、どの小循環が土地と商いの両方に合うのか？

Phase 1 は「竹→山羊」だけに絞らない。複数の小循環を並行して試す

家族の再レビューを受け、山羊単独案から「比較して残す」設計へ更新。

森・竹

伐採・林縁整備
→ 丸太／竹材／敷料

羊・山羊

小頭数で比較
→ 草地管理／肉／羊毛／堆肥

ハーブ・畑

痩せ地・混植
→ 土づくり／商品化／動物との相性

養蜂

林縁・伐採後の条件
→ 蜜源／採蜜／分蜂管理

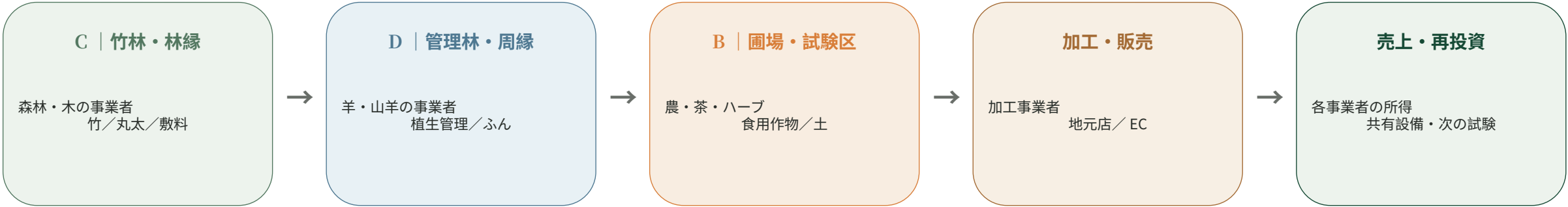
共通して測る：労働時間 | 資源量 | 販売価値 | 土地への影響 | 年間管理のしやすさ

候補プール | 羊・山羊・ハーブ・養蜂・丸太・竹・菌類・小規模作物・茶・果樹 ※ Phase 0 後に 2 ～ 3 テーマを選ぶ

次の問い 何を残すかは、先に決めず、現地の数字と担い手の商いで決める。

最初の 3 ～ 5ha で「誰が・どこで・何を渡すか」を一枚につなぐ

ゾーニング、資源循環、商い、先行事例を分断せず、実際の動きとして読む。



協議会：土地利用・資源交換・新規参入を更新
事務局法人：契約・安全・保険・共有設備・会計を支える

Circular Food System
食料→副産物→草・残渣

Palopuro
別経営のまま資源交換

Kalundborg
契約・調整・共有インフラ

高千穂郷・椎葉山
山地を複数生業で使う

牛は 0 頭スタート。Phase 1 は羊・山羊を小頭数で比較する

家畜を置くことを成功条件にせず、土地が支えられる量から逆算する。

Phase 1

羊 + 山羊

植生・暑熱・寄生虫・柵・労働・堆肥を比較。
羊では肉・羊毛の事業性も測る。

乳牛を入れる 5 つの Gate

- 1 | 水

夏の最低流量と水質
- 2 | 餌

人の食料と競合しない飼料
- 3 | ふん尿

農地が栄養を受け止める
- 4 | 人

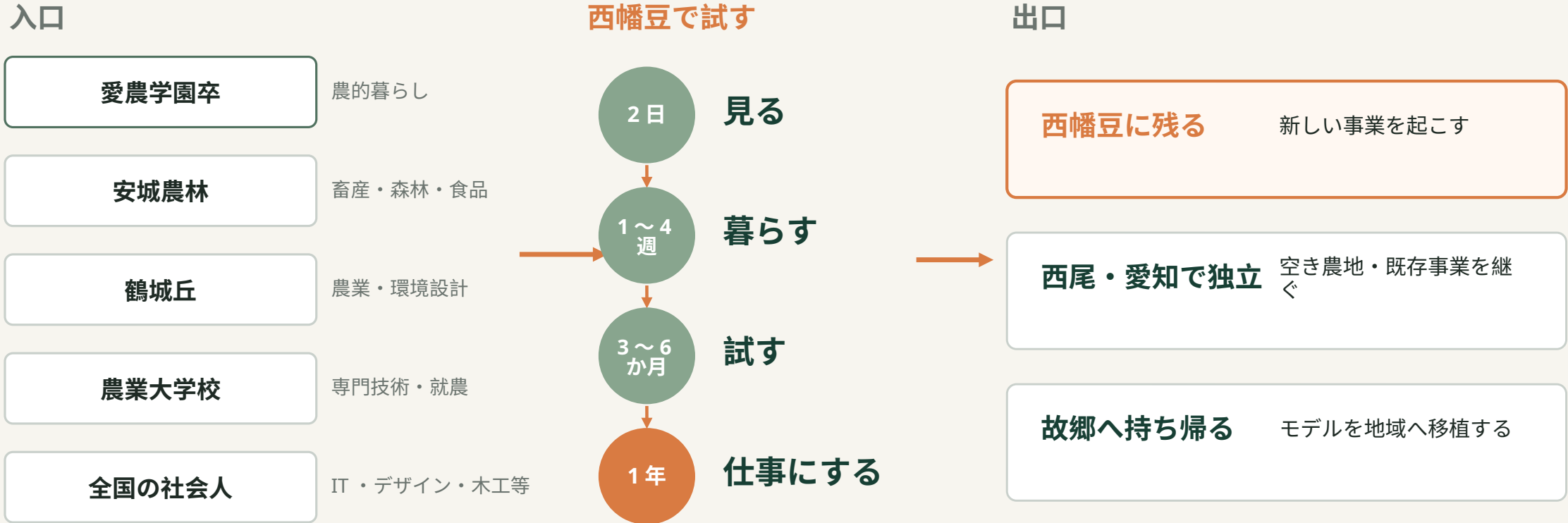
毎日の管理を 2 人以上が代替
- 5 | 加工・販売

乳を何にして誰が買うか

5 条件が揃わなければ、2032 年でも牛 0 頭で成功。

次の問い 牛を置くかではなく、土地と仕事の循環が成立するかを問う。

資源循環と同時に、人を「学ぶ→試す→仕事にする→独立」まで循環させる



「全員を西幡豆に囲い込む」のではない。
人材を地域へ送り出すことが成果。

—— 次の問い では、既存の学校・教育資産は西幡豆で何を担うのか？

新しい学校は要らない。既存の農業教育に「答えのない実地」を提供する

人材源	既に持つ強み	西幡豆で渡す課題
愛農学園	農業を「暮らし」として学ぶ。卒業生1000人超、約45%が農業の担い手	共同生活・農的暮らし・卒業後の「次の一歩」
安城農林	農業・園芸・食品科学・森林環境・動物科学など6学科	山羊・乳加工・森林・堆肥・商品化を実地課題に
鶴城丘（西尾）	アグリサイエンス＋環境デザイン。地元の農業教育	地形・測量・農地・地域接続を地元高校生の探究へ
愛知県立農業大学校	酪農・養豚・養鶏・野菜等の専門教育＋社会人研修	飼料・経営・飼養・加工を「実案件」で検証

——— **西幡豆だけが持つ教材＝「先生も答えを知らない143.5ha」**
次の問い では、実際に最初の運営を誰が担うのか？

Sources: 愛農学園、安城農林高校、鶴城丘高校、愛知県立農業大学校 各公式サイト（2026年確認）。

最初の担い手は「雇われる 6 人」ではない。自分の仕事を持つ小さな経営者が集まる

6FTE 中心モデルを撤回。人数ではなく、生活できる小さな経営が何件成立したかを見る。

農・茶・土

畑／吉良茶／ハーブ／土壌

動物・森

羊・山羊／蜂／丸太／宮繕

加工・商い

食品／木工／販売／連携

各自が持つ

売上・顧客・専門性・経営判断

共同化する

土地・共有設備・安全・物流・ルール

事務局法人が県との契約・安全・保険・共有設備・会計を支え、協議会が土地利用と資源交換のルールを決める。

次の問い

雇用人数を先に決めず、仕事が生まれた機能から独立経営として育てられないか？

人が地域に残る条件は、農業に「自分の専門 X」を持ち込んで仕事にできること

地域資源

森・竹

畑

動物

既存農家

駅・店・海

ここで生まれる仕事

生産

野菜・果樹・羊・山
羊・ハーブ

加工

茶・発酵・惣菜・木工

販売・物
流

直売・EC・共同配送

森林・土
地

竹・林・水・保全管理

教育・研
究

高校・農大・企業研修

X

IT・デザイン・映像・
機械修理

地域に残るもの

専門職

所得

経営者

取引関係

次の参入余地

「農家を増やす」だけではなく、
農村に付加価値職種を戻す。

次の問い その複数の仕事を、どう小さな経営として成立させるか？

複数の小さな経営が、それぞれの商いを持つ。事務局は共通インフラを支える

年商 5,000 ～ 6,000 万円・6FTE の単一事業モデルは撤回し、事業ごとの小さな採算を検証する。

吉良茶

茶摘みだけでなく、剪定・草刈り・施肥・製茶まで年間の仕事として開く。

HAZUFORNIA ORANGE（仮称）

夏みかん系等を小試験区で比較。生果＋ジュース・マーマレード・発酵へ。

羊・山羊＋養蜂

土地管理と畜産・蜂の商いを別々に検証。頭数は餌・労働・販売から逆算。

ハーブ＋丸太利用

痩せ地・林縁・森林管理を、小さな商品・仕事へつなぐ。

地域から寄せられた茶の提案は、収穫体験ではなく「地域による共同設計」の入口として扱う。

次の問い どの商いが成立するかは、顧客・労働時間・土地影響を事業ごとに測って決める。



地域による共同設計の風景

—— お茶・ハーブ・養蜂・羊と山羊・丸太利用が重なり合う ——



吉良茶の年間管理

茶摘みから製茶まで、
地域とともに育て上げる。



ハーブ栽培

季節のハーブを育て、
香りと癒しを届ける。



養蜂

山の花々の恵みを受け、
はちみつを採蜜する。



羊・山羊

草を育み、命をつなぐ。
ふれあいも生まれる。



丸太利用

地域の木を活かし、
暮らしと場を支える。

人と自然がつながり、学びと交流が生まれる持続可能な循環を、地域みなさんと共に築きます。



四季で育てる運営カレンダー

— 茶・果樹・ハーブ・養蜂・羊と山羊・交流活動を通年でつなぐ —



春



茶園の手入れ・新芽



ハーブの植え付け



交流イベントの始動



夏



茶摘み・製茶体験



果樹・ハーブの育成



滞在・学びの場



秋



果樹の収穫



はちみつ採蜜



収穫祭・販売



冬



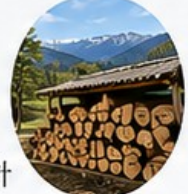
剪定・保全



丸太利用・整備



次年度に向けた共同設計



吉良茶



茶園の手入れ・新芽



ハーブ



植え付け・株づくり



養蜂



巣箱の点検・春の管理



羊・山羊



出産期・放牧開始



交流



交流イベントの始動

茶摘み・製茶体験

育成・摘み取り・クラフト体験

採蜜準備・見学体験

放牧・牧草管理・ふれあい体験

滞在・学びの場の拡充

仕上げ・販売・お茶のふるまい

収穫・ドライ・販売

はちみつ採蜜・製品づくり

健康管理・毛刈り・乳活用

収穫祭・地域交流・販売

剪定・畑の整備・土づくり

剪定・株の保全・土づくり

越冬管理・巣箱整備

越冬準備・小屋整備

ふりかえり・次年度計画



観光の一日利用だけでなく、季節の手入れと地域の関わりが積み重なることで、通年の営みとして成立する。



県との契約は一つ。意思決定・実務・経営は、役割を分ける

「事務局法人が全部を抱える」案から、協議会＋事務局法人＋独立事業者へ更新。

協議会

土地利用・新規参入・資源交換の意思決定
独立事業者＋地域＋専門家

事務局法人

県との契約・安全・保険・共有設備・会計・共通インフラ

独立事業者

農・茶／畜産・蜂／森林・木／加工・販売／果樹・研究など
各自が自分の事業を持つ

ネットワーク型は善意で回さない | 量・品質・時期・価格・責任・撤退を契約と運用ルールにする

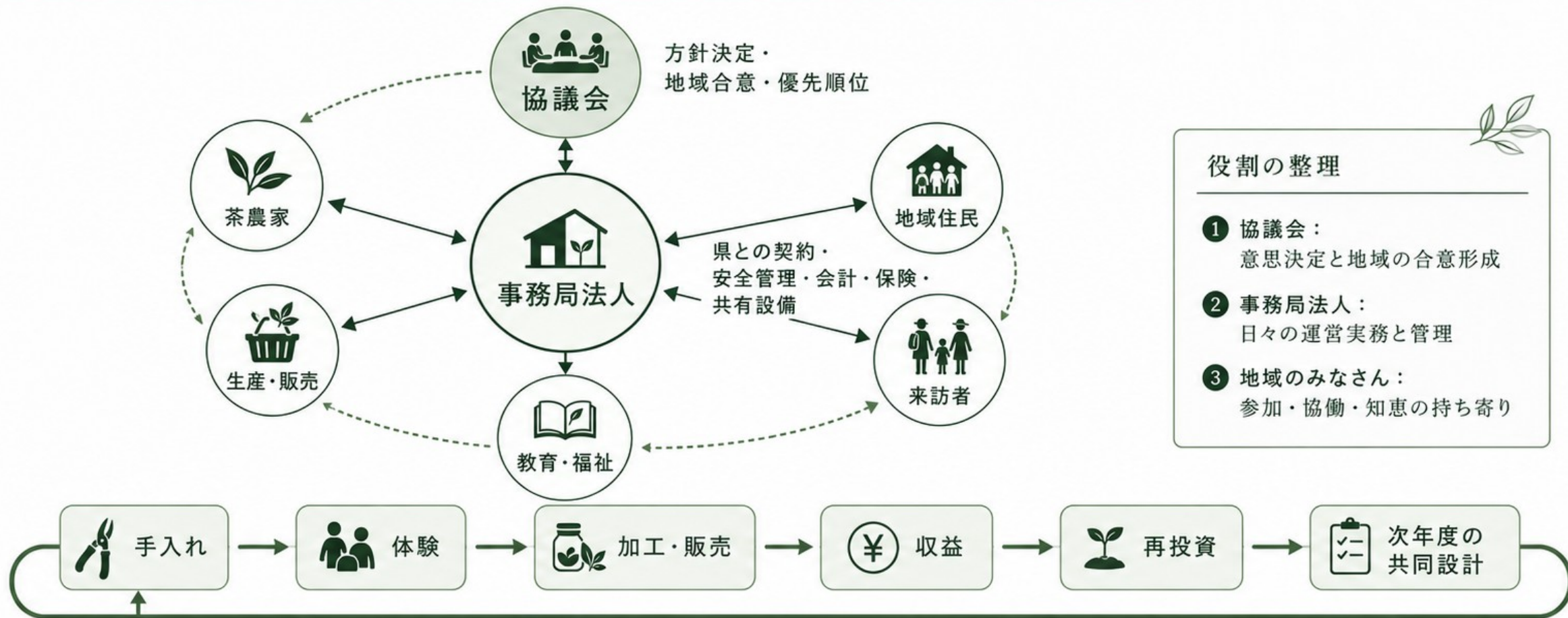
次の問い

この役割分担なら、管理性と地域の自立性を両立できるか？



地域と事務局が支える運営体制

協議会が方向を定め、事務局法人が運営を担い、地域と来訪者が循環を育てる



特定の誰かに依存するのではなく、役割を分けながら、地域で支え続けられる仕組みをつくる。

先行事例から借りるのは施設ではない。「分業をつなぐ設計原理」だ

場所・事例	参照するポイント	西幡豆でどう使うか	ゾーン
<div>FINLAND</div> <div>Palopuro / Hyvinkää</div>	3 農場＋加工＋バイオガスを別経営のまま接続	共同ハブ／専門分業モデル	A ・ B ・ C ・ D
<div>DENMARK</div> <div>Kalundborg</div>	独立企業が余剰資源を交換。協会・事務局がガバナンス	事務局法人／共有インフラ	A ・ 全体
<div>JAPAN</div> <div>高千穂郷・椎葉山（宮崎）</div>	平地が少ない山間地で林業・しいたけ・和牛・茶等を組合せ	森を森のまま複数生業で使う	D ・ E ・ F
<div>HOKKAIDO</div> <div>大規模放牧酪農</div>	広い草地で飼料・家畜・ふん尿を一経営内で循環	「広さ」で成立するモデルはコピーしない	境界条件

—— 次の問い 完成形を一括発注せず、 Gate を通るたびに土地と事業を増やす。

完成形を先に造らない。成立した「小さな経営」と「資源交換」だけを増やす

Gate を通らないテーマは縮小・停止できる。



各 Gate：土地の安全 | 事業者所得 | 資源交換量 | 土地管理 | 顧客 | 次の参入者

次の問い 「何人雇うか」ではなく、「何件の経営と循環が持続したか」で進捗を測る。

県有地を処分するのではなく、人材・産業・環境政策を同時に試す資産に変える

1

人材

農高・農大・愛農・社会人が
「学ぶ→仕事にする」場所

若者の県内就業／新規就農／半農半
X

2

産業

生産だけでなく加工・販売・
研究・教育まで
地域に付加価値を残す

複数の小さな事業者と専門職

3

土地・環境

大規模造成せず、森林・竹・
水・農地を
土地履歴に沿って管理

未利用県有地の維持管理＋実証

—— 次の問い では、企業庁に最初に何を決めてもらえば始められるのか？

企業庁に求める最初の決断は、3～5haを先に貸すことではない。Phase 0を一緒に始めることだ

まず基礎情報と計測条件を共有し、使える3～5haを確定してから期限付き実証へ進む。

01

基礎情報＋計測条件 境界・保安林・道路・過去調査・計測可否・法規制

02

使える3～5haを確定

水・微気象・土・資源・境界を測り、候補地を確定

03

期限付き Phase 1

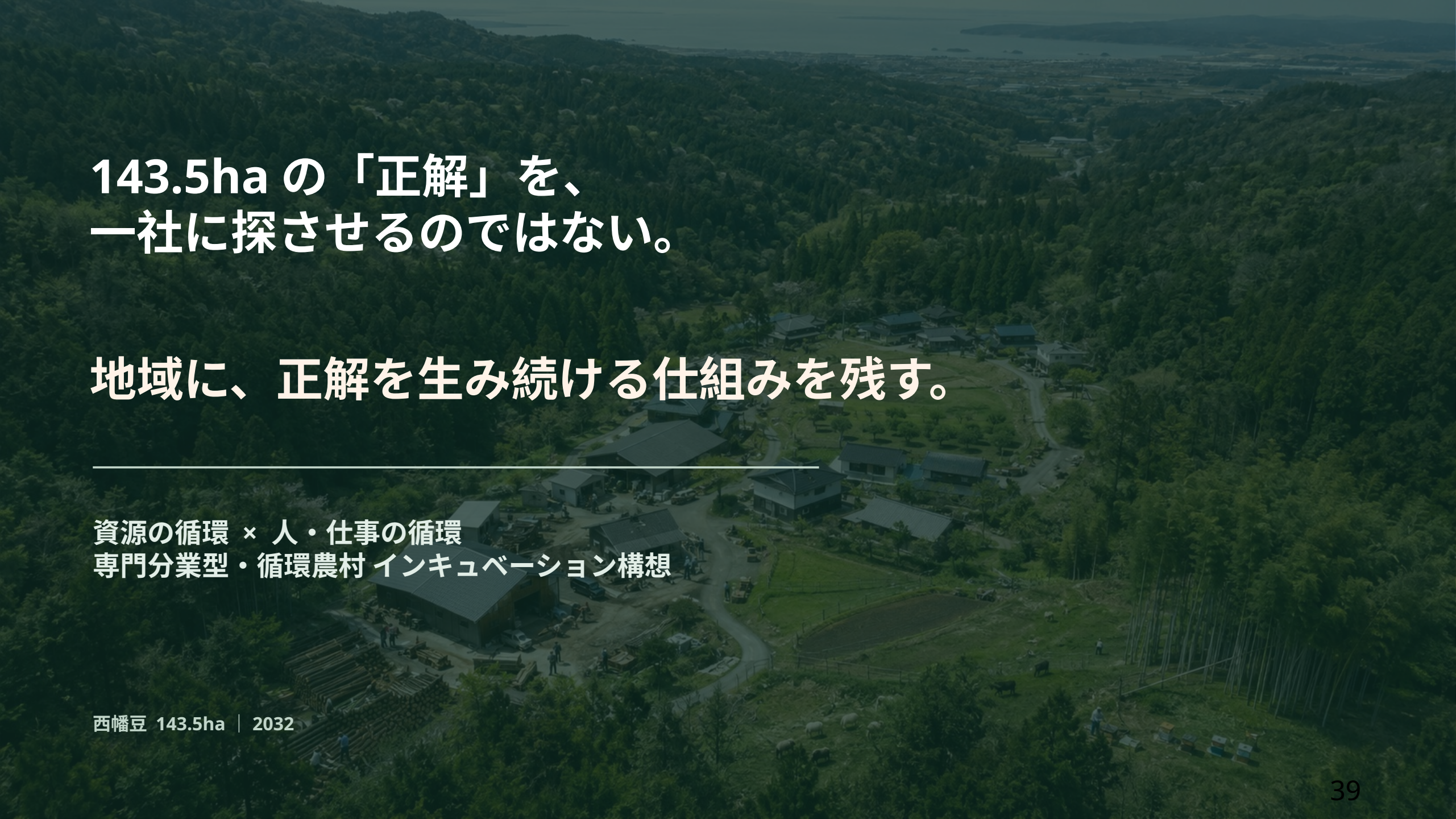
確定した3～5haで2～3テーマを12～24か月実証

04

Gate＋庁内横断

企業庁＋農業水産局＋西尾市等で、継続・縮小・停止を判断

最初から「土地全部」「大型補助金」「完成施設」を求めない。まず、試して判断できる状態をつくる。



143.5ha の「正解」を、
一社に採させるのではない。

地域に、正解を生み続ける仕組みを残す。

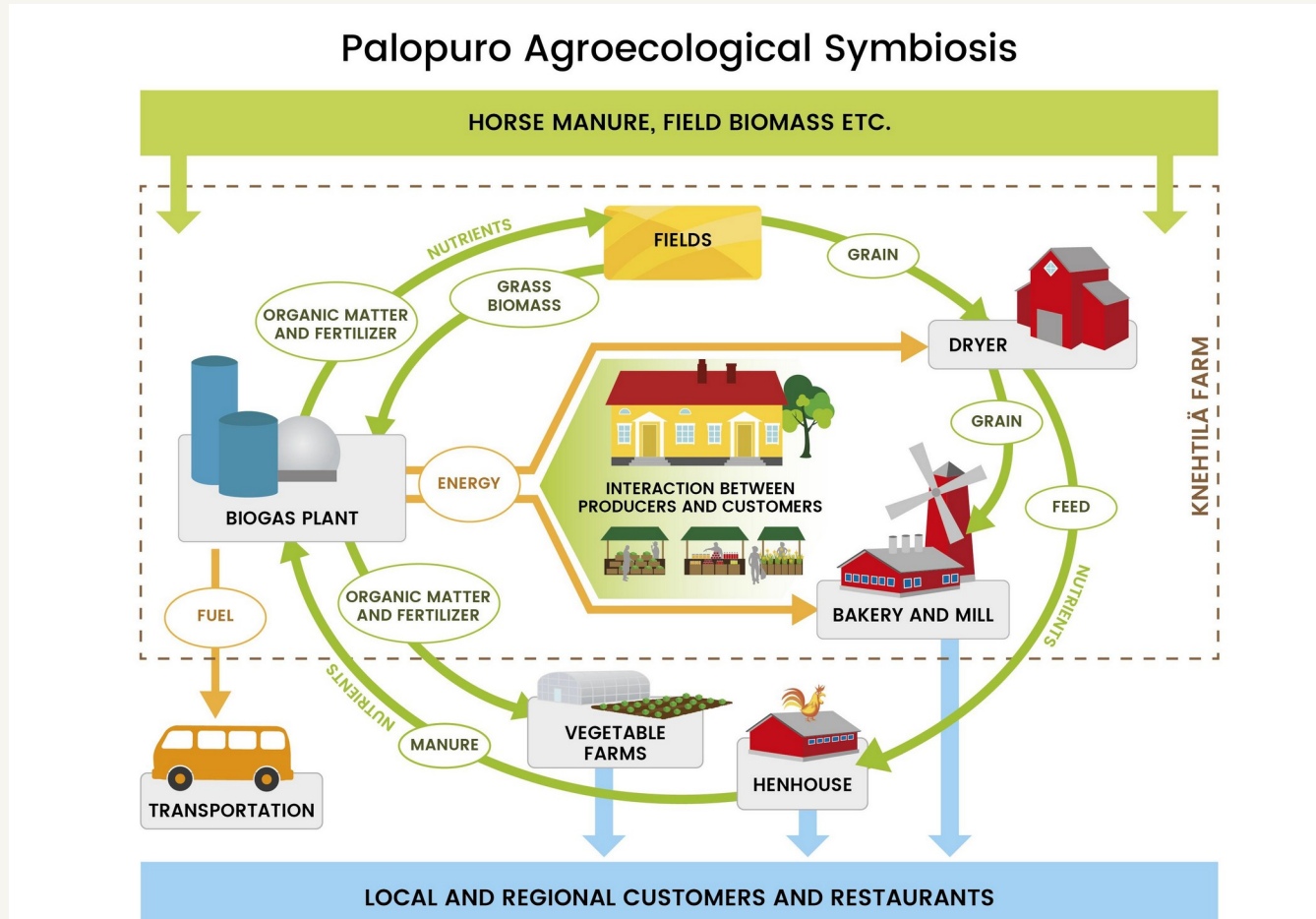
資源の循環 × 人・仕事の循環
専門分業型・循環農村 インキュベーション構想

APPENDIX

先行事例と試算の根拠

本編では「何を借りるか」だけを示し、詳細はここに分離する。

Appendix | フィンランド・Hyvinkää：別経営の専門農家を地域でつなぐ



場所 Hyvinkää 市の南約 6km
ヘルシンキの北約 60km

構成 3 農場 + パン工房・製粉 +
バイオガス等を地域で接続

研究で見えたこと

システム内の有機物・エネルギーをつなぐことで、
窒素・リン余剰を減らし、エネルギー自給を高める可能性。

西幡豆で借りるもの

「一社で統合」ではなく、
独立した専門経営を共同ハブで接続する設計。

Appendix | デンマーク・Kalundborg：独立企業を事務局と共有インフラでつなぐ

1972～

製薬

自治体



エネルギー

素材

水

現在は複数の官民企業が、余剰の水・エネルギー・材料を交換。
非営利協会の総会・理事会・事務局がガバナンスを担う。

西幡豆で借りるもの
「複数経営＝県が複数社を直接管理」ではない。

Appendix | 宮崎・高千穂郷椎葉山：森を森のまま複数の生業につなぐ

世界農業遺産 | 2015

平地が極めて少ない山間地

それでも、土地を平らにして単一用途へ変えるのではなく、地形に合わせて複数の生業を重ねてきた。

針葉樹

木材

広葉樹

しいたけ

草地等

和牛

畑・棚田

茶・稲作

斜面

西幡豆で借りるもの

143ha を農地化しない。
森・竹・農地・水を、それぞれの地形のまま
仕事にする。

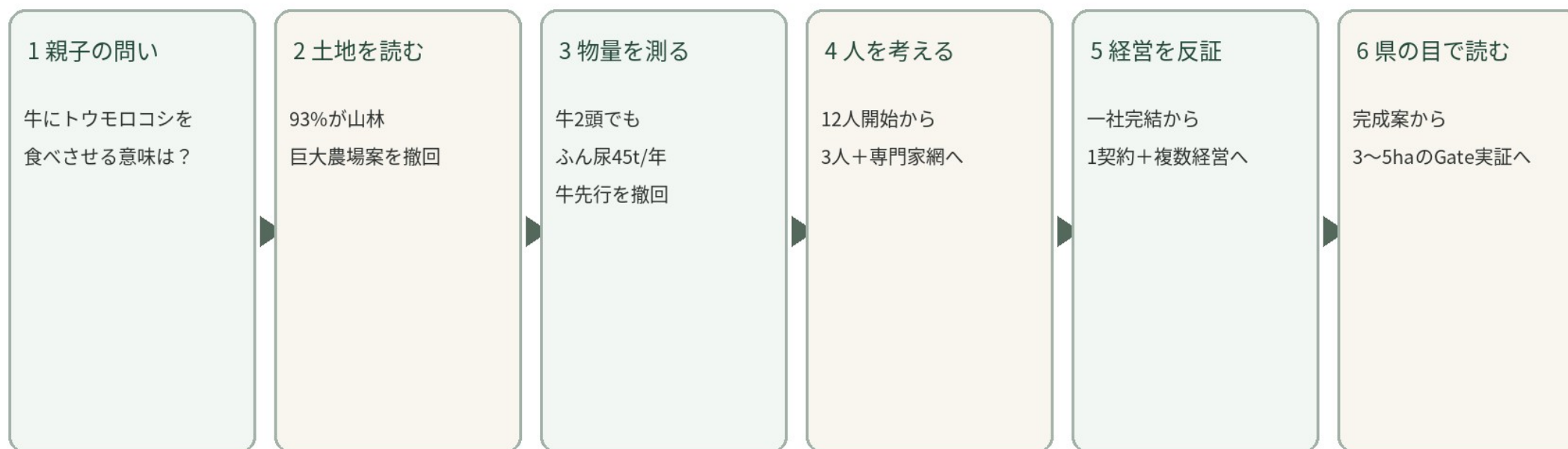
Appendix | 数字は予測ではなく、現地実測で更新するための仮置き

項目	仮置き	確定に必要な確認
初期利用面積	3 ～ 5ha	測量・法規制・進入路・管理境界で確定
羊・山羊	小頭数	草量・季節変動・柵・暑熱・寄生虫・労働を比較
乳牛	0 頭スタート	水・非競合飼料・ふん尿・人・加工販売の 5Gate
Phase 1 テーマ	2 ～ 3 テーマ	羊・山羊・ハーブ・養蜂・丸太等から選ぶ
茶・果樹	小試験区	土・水・日照・年間管理・顧客を確認
期間	2026 ～ 2032	毎年 Gate 評価して縮小・停止・拡張

強さは、数字を固定して押し通すことではなく、「測れば変える」と最初から設計していること。

この案は、家族の問いをそのまま美談にせず、成立しない前提を一つずつ捨ててきた

この案は「足した」のではなく、反証で削りながらできた



重要なのは、現在案が「最初から正しかった」のではなく、成立しない前提を一つずつ捨ててきたこと。

「何を調べたか」より重要なのは、「調べた結果、何を撤回したか」。現在案は反証の履歴ごと引き継げる。

家族の再レビューと地域の声で、「大人が作った前提」をさらに撤回した

× 農業学校を人材の主役にする

→ 「こういう生き方もある」という入口を主役にする

× 山羊だけで Phase 1 を組む

→ 羊・ハーブ・養蜂・丸太など複数の小循環を比較

× 3 人→ 6FTE の雇用モデル

→ 独立した小さな経営者が協議会でつながるモデルへ

× 収穫だけを「農業体験」にする

→ 吉良茶は剪定・草刈り・施肥・製茶まで年間管理を開く

× 「愛知でなければならない」

→ 全国に移せるモデルを、試せる条件のある愛知から始める

× 共同法人が全員を雇用・所有

→ 協議会＋事務局法人＋独立事業者へ

+ 地域からの共同設計

→ 吉良茶／HAZUFORNIA ORANGE（仮称）を実証候補へ

現在も未確定：水量・水質・微気象・土壌・茶 / 果樹適地・羊 / 蜂の管理・最初の実践者・事務局法人の法的形・個別採算。